

## 岩手医科大学歯学会第22回例会

日時：昭和61年6月28日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階講義室

### 演題1. 髄床底穿孔部の処置法に関する実験的研究

○立花 透, 佐藤 一裕, 澤田 正文,  
遠藤 正道, 渡辺 一史, 石田 達郎,  
武田 泰典\*, 石橋 真澄

岩手医科大学歯学部保存学第一講座  
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座\*

我々は以前より、髄床底部の穿孔に対する封鎖材料として、アマルガムが比較的良好な成績を得たことを報告してきた。今回はさらに、無機医用生体材料である、ハイドロキシアパタイト製剤、アバセラム粒子、 $\phi 10\mu$ 及び $100\sim 250\mu$ （旭光学社製）を封鎖材として応用した。

実験は、若犬6頭の前歯臼歯計46歯を用いて行い、3か月経過後、病理組織学的方法により観察した。

#### 実験結果

##### 1. 欠損部の補填状態

補填状態は、歯槽中隔欠損部に填塞したアバセラム粒子と、その周囲に生じた新生骨両者の状態により判定した。

$10\mu$ 応用群では、23例中、概良4例、不良19例であった。

$100\sim 250\mu$ 応用群では、良好5例、概良4例、やや不良9例、不良5例であった。

##### 2. 欠損の補填状態と炎症性変化との関係について

$10\mu$ 応用群では、補填状態が概良の4例は炎症性変化が全て(-)であり、不良19例では、(-)のもの1例、(+ )のもの5例、(++)のもの6例、(+++)のもの7例であった。

$100\sim 250\mu$ 応用群では、補填状態が良好の5例は炎症性変化が全て(-)であり、概良の4例は、(+ )のもの2例、(++)のものが2例であった。やや不良9例では、炎症性変化が(+ )のもの4例、(++)のもの3例、(+++)のものが2例であり、不良5例では、(+ )のもの4例、(+++)のものが1例であった。

以上、犬の歯の髄床底を実験的に穿孔し、 $10\mu$ ならびに $100\sim 250\mu$ のアバセラム粒子を穿孔部に填塞

した結果を報告した。アバセラム粒子の大きさで比較すると、今回、我々の実験では、 $100\sim 250\mu$ 応用群の方が填塞状態は良好であり、かつ、炎症性変化も軽度のものが多くみられた。

### 演題2. 脱灰骨標本の抗-ロイシンアミノペプチダーゼ親和性について

○立花 民子, 坂倉 康則, 藤原 尚樹

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座

脱灰硬組織の酵素組織化学は、標本作製過程に多くの酵素活性が失われるため成功しないことが多い。これに対し、免疫組織化学では、抗原性さえうまく保持出来れば、たとえ酵素活性が失われても酵素の局在を証明出来る可能性がある。我々は、破骨細胞に局在が知られているロイシンアミノペプチダーゼ(LAPase)の抗体をもちいて脱灰骨の免疫組織化学的染色を試みた。

材料と方法：ウサギで作製したブタ腎由来のLAPaseに対する抗血清をもちいて、ホルマリン、PLP、ザンボニ液などで固定しPlank-Rychlo液またはEDTAで脱灰された手持ちの数種類の顎骨標本を間接法による酵素抗体法で免疫染色した。発色はDAB反応によった。

結果と考察：ホルマリンとPLPで固定されたラット、イヌ、およびサル歯槽骨表面の破骨細胞は抗-LAPaseに強い親和性を示したが、ザンボニ液で固定したヒトとラットの破骨細胞は親和性を示さなかった。脱灰剤の比較では、EDTAよりもPlank-Rychlo液のほうがはるかによい染色結果を示した。このことは、短時間の内に脱灰を終了することが抗原性の保持にとって肝要であることを示しているものと思われる。骨芽細胞にもLAPaseが局在するとの報告があるが、明瞭な反応は得られなかった。今回の染色では、破骨細胞のほか結合組織中の肥満細胞にも強い抗-LAPase親和性が認められた。